

酒井仁

表紙 / 高浜太郎

二次元ポチ文庫

精霊騎士

アクエアル

外伝

裏切りの騎士

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『精霊騎士アクエアル外伝 裏切りの騎士』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『精霊騎士アクエアル 隷属の花嫁』『精霊騎士アクエアルⅡ 穢されし聖涙』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに
お読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



精霊騎士
アクエアル
外伝

裏切りの騎士

酒井仁

表紙 / 高浜太郎

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

アクエアル

王国の危機に際し、聖なる泉より召喚された水の精霊騎士。人々に混乱をもたらす火の精霊ヴァハに戦いを挑むが、姦計によって快楽に堕ちてしまう。

マリオン

王国の騎士の称号を得た青年。騎士の誇りと正義感を抱いている。

ヴァハ

国王エイヴァゼインの身体を借りて現世へ召喚された火の精霊。

「王国」に火の禍あり。乙女の祈りもて召喚されしは美貌の水霊騎士。災厄の根源を断たんと聖なる剣を振るうも、悪逆の根は深く、禍なる火の王の前に正義はついに挫かれる。かくて「王国」は闇の帳に閉ざされ、民は苦難と絶望の淵でただ嘆くのみであった……。

二年の見習い期間を終え、国王エイヴァゼインより騎士の称号を賜った青年騎士、マリオン・ブリューゲルは、騎士団員のみが出席を許される宴に初めて参加していた。

王国全土より集められた豊富な食材を用いた料理はまさに絢爛豪華、騎士一人ひとりに美しい侍女が寄り添い、薄絹しかまとわず、手ずから料理を食べさせ甘えているその様は、侍女というより娼婦のようでさえある。

（度重なる戦乱と干ばつで、各地方ともに農作物は不作と聞いている。辺境では村ごと餓死に追い込まれたという噂さえあるのに……：このような馬鹿げた贅沢が許されているのだろうか？）

見習い時代、先輩騎士に付き従って戦場を何度も駆けてきたマリオンの目に、王国は荒廃の一途をたどっていると思えない。にもかかわらず、王エイヴァゼインは反乱分子の平定と称しては徒に戦火を広げ、戦いに酔いしれている。

「どうしたマリオン。その女では不満か？」

先輩騎士は早くも葡萄酒に酔って赤ら顔をしている。侍女の肩に回した手を衣服の内側

に突っ込んで乳房を揉むと、女は身をくねらせて嬌声を上げる。

マリオンの給仕をしている侍女も、鼻にかかった声を漏らしてもたれかかってくる。威厳あるべき王城の広間とも思えぬ光景に鼻白む思いだが、玉座の王が実に満足げにしているので、なにも言えない。

巨大な体躯と髭の王の傍らには、侍女は付いていない。宴に酔いしれる騎士たちを眺めている背中からは威圧的なオーラが立ち上り、マリオンは無形の緊張を強いられる。王には魔界に通じた特別な力があるという話も、あながち嘘ではないのかも知れない。

そしてまさしく「魔王」にふさわしいエイヴァゼインには、彼だけの特別な付き添いがあるということ、その場の誰もが知っている。

「おう、そろそろ始まるようだぞ、マリオン。お前もあれを見ればそんな仏頂面じゃいられなくなるぞ」

「は、なにか特別な出しものでも……」

悩ましい香料が青年騎士の鼻腔をくすぐる。異国の妙なる調べと共に現れた銀髪の美女の姿に、マリオンの息が止まる。騎士たちの間からも、押し寄せる波濤のようなどよめきがかかる。

「ア、アクエアル……王妃、様………?」

しゅらりと音を奏でそうな銀の長髪。両の瞳は碧のクリスタルもかくやと思わせる深い

輝きを放ち、通った鼻梁に蕾の唇、顔の造作は恐ろしいまでに整っている。

そしてなにより目を引くのは、完璧なるプロポーションを惜しげもなくさらけ出すその衣装。侍女たちのものよりさらに際どく、乳房の丸みや腰のくびれがくつきりわかり、素肌が覗く箇所も少なくない。

下手な裸身よりも扇情的で、申し訳程度に隠された乳首など、しこり具合まで確認できるいやらしさだ。本人もそのことを自覚しているのか、染み一つない素肌が羞恥にうつつら火照っているのが、なおエロスを倍増させている。

エイヴァゼイン王の妃にして謀反人、反乱軍のリーダーとして虜囚の目にあい、王の慰み者となつてゐる水の精霊騎士——アクエアルである。

（私は遠くからしか見たことがなかったが、噂にたがわぬ美しさだ。水の精霊というもの、本当のことやも知れぬ）

「我が妃、アクエアルよ。今宵の宴には初参加の騎士もいる。存分に新参の目を愉しませてやるがよい」

「……………はい、わ、我が君。では舞でも一手」

王と目を合わせぬように顔を背けつつ、精霊はその命に従うしかない。そのことを熟知している王は唇を歪め、指をぱちりと鳴らす。轟ッ、と巨大な炎が立ち上り、そこから見るもおぞましい怪物が出現する。

「な、なんと醜い……ッ。あれは本当に生き物なのか!？」

豪胆をもつて鳴る騎士団員たちですら怖気を震う巨大な肉塊は、全身から無数の突起を生やし、どこが頭やら尻やら皆目わからない。何十本、何百本と生えたそれがまさしく男根であることに気付き、侍女たちが恐怖のあまり失神する。

「どうだ、我が妃。お前の大好物を全身から生やした、特製のキメラだ。遠慮せず、存分に味わうがいい」

それが忠誠を誓った王の言葉でなければ、マリオンは即座に怪物と精霊の間に割って入っただろう。だが、君主より賜りし騎士の資格は、青年にはまだ重すぎる。面白がつて囁し立てる他の騎士たちの中で、マリオンは美しい精霊が怪物に辱められるのを見守ることしかできない。

「では……あの魔物の……あれをすべて満足させられればよいのですね。わ……わかりました、我が君」

衣擦れの音を立てて、化け物に近づく精霊。たおやかな手を伸ばし、無数に突き出た陰茎に指を絡めると、怪物は不気味な声を上げてのたうつ。

「こ、こらっ、おとなしくしないか……うう、臭……ッ」

両手に握った陰茎を上下にしごく。悪夢のような光景に騎士たちの興奮はいや増すばかり。血走った男たちの視線を浴びて、精霊の目元が赤く染まる。

なまじ怪物に犯されるよりも、自分から怪物の陰茎を手にして淫らな奉仕をさせられるという行為の方が恥ずかしいのだろう。早く射精に導こうと手首のスナップを利かせ、きゅつきゅとしごき立てていると、先端からぬらぬらした透明な液体が滲んでアクエアルの指を汚す。

「くっ、早く出さないか……あつ、ひゃううっ？」

びゅるっ　びゅるびゅるッッ！　なんの前触れもなく、白い樹液が宙を舞う。それはべつとりと精霊の肩や頬にまで飛んでへばりつく。精液特有の生臭い臭気がふうんと立ち上って美貌の精霊を包み込む。

「どうした、まだたった二本だけ？　そいつのちんぽ何本あると思ってるんだ」

顔を歪める美女に野次が浴びせられ、下品な笑いがマリオンを不快にさせる。

仮にも妃に対する言葉遣いとは思えないが、騎士たちがアクエアルを見下しているのはよく理解できる。妃とは名ばかりでアクエアルは敗残の将、エイヴァゼインの性奴隷にも等しい存在なのだ。

（くっ、騎士道とはなんなのだ！　女性を辱め、貶める騎士道など……ッッ）

そう思いつつ、魔物の精液を浴びた銀髪の美女を見るだけで、股間が反応するのは抑えられない。アクエアルは果敢にも新たな陰茎を手に、額にうっすら汗をかきながら不気味な奉仕を続ける。眉をひそめ、いつしか口は半開きになり、荒い息遣いはまるで悶えてい

るかのようだ。

いや、そのころにはマリオンも他の騎士たちも気付いていた。最初の精液を浴びてから、明らかに精霊の顔は上気し、興奮の兆候を見せている。

「はあッ、は、あふう……ンンッ！ あふう、むちゅっ……れろ、ちゅば……」

肉塊から生えている陰茎はまさに無数、両手に握っていても目の前にも乳房の前にも勃起した男根がそそり立っている。アクエアルは愛らしい唇を開けると、目の前の肉茎にしゃぶりついていた。

その下方から生えている竿に乳房を押しつけてゆすると、頼りない薄絹はずれて、生乳の間に魔茎が挟まれる。乳房だけではない、平らな腹部も肘もすべて怪物に押し当てられるようにして、まさに全身を用いて魔陰茎に奉仕しているのだ。その顔からは羞恥が消え、むしろ被虐の快感にあふれている。

ぶぴゅっ、どびゅどびゅっ！ うおおおおおんっつっ。

両手に握った茎から再び大量の射精、乳房の間にも白濁を迸らせ、肉塊が快美の咆哮を上げる。魔物のザーメンを全身に浴びて、水の精霊も悦びに全身を打ち震わせ、ついに卑猥語がその唇から発せられる。

「ああッ、ちんぼ汁がいつぱいッ……！ おっぱいにもッ、お口にも飲ませてッ、魔物ちんぼの汁飲ませてエエッ！」

半開きの唇にびゆるびゆると臭い牡汁が注ぎ込まれる。アクエアルはそれを舌にねっちよりと絡めて味わってから飲み下す。どんな娼婦でもできないようなおぞましい行為に悶えよがる水の精霊は、それでも美しくマリオンの目に映っている。

ほとんど全身で魔物に抱きつくような格好で、銀髪の精霊は素足の指にまで魔物茎を挟んでしごき立てる。精液と先走りの汁が入り混じった凄まじい臭気を胸いっぱい吸い込んで、アクエアルはついに股を大きく広げ、ひときわ巨大にそそり立った肉柱の上に腰を落としていく。

「あああッッ、入ってくるう、魔物のちんぽがおま〇この奥まで……ッッ。こんなッ、大勢に見られながら、魔物ちんぽハメちゃうう……」

精霊の蜜壺はよほど心地よかったのか、挿入と同時に怪物は白い液を噴出し始める。肉の合わせ目から「びゅっ、びゆるっ」と毒液が噴きこぼれ、乙女の太ももを幾筋も伝い落ちていく。

後でどれだけ後悔するかわかっていても、もはや美しき精霊の肉体は忘れようもない快楽を刻みつけられ、支配されているのだ……青年騎士マリオンは、目の前の残酷な現実には呆然としつつも、股間のもものは衣服を突き破らんばかりに勃起していたのだった。

夜の王城は、沈黙のうちにあった。王妃にして虜囚でもある水の精霊騎士アクエアルの

部屋の前には、衛兵が警護に当たっている。だが、アクエアルが本気で部屋を抜け出ようと思えば、警護などなんの意味もない。

美しき精霊を本当の意味で縛りつけているのはエイヴァゼイン——その身に宿った火の精霊王・ヴァハの力であり、敗北の苦い記憶である。

囚われの精霊姫が幽閉されている王城の一室に、若き騎士がひそかに近づこうとしていた。衛兵に見咎められれば、当然入室は許されない。青年騎士マリオンは首から下げた水晶のペンダントをかざす。すると蒼い水晶はたちまち水となつて青年の身体を覆い、あたかも透明のマントを羽織つたかのように青年の姿を不可視のものにする。

衛兵に気付かれることもなく、マリオンは王妃の部屋に入る。と同時に、精霊の前に姿を現した。

「アクエアル様——今宵も参りました」

「ああ、マリオン……」

薄手のナイトドレスは美女の肉感的なボディラインを引き立たせる、深い紺色。昼間の姿にも増して色気を放つ女体を、逞しい腕で抱きしめると、待ちかねていたように唇を重ねる。唇を割って押し入ってくる青年の舌を受け入れ、しばし濃厚な接吻を交わす。

「んちゅ、れる……アクエアル様の唇は、天上の蜜のようです」

「んっ、わ、私の身も心も既に地の底まで墮落し、穢されています。マリオンのような前

途ある若者が、私などに触れては………んうっ、はあんっ」

唇から首筋に舌を這わされ、精霊姫は甘い声で身悶える。

青年のぶ厚い胸で巨乳が潰れ、大きな手が愛おしげに女の背を撫で下ろし、尻肉を愛玩する。精霊の甘い匂いを胸いっぱい吸い込むと、マリオンは熱い吐息を落として女体をわななかせる。

「貴女の染み一つない真つ白な肌も、気高き魂も、なに一つ穢れた部分などありはしません。あの傲慢な騎士どもに幾度犯されようと、王の慰み者になろうとも、私は貴女に忠誠を誓い、永久に尽くす所存です」

「ですが、私は我が君の所有物。こうしてあなたに会えるのは、我が君が戦場に出ているときだけ………会うほどに別れがたらくなりましょう」

「ならば、なぜ身隠しの水晶を私などにお与えになったのです。私の口づけで悶え、私のものでよがって下さったのは偽りだと仰るのですか」

「いいえ、違います、ちがいます、が………あふうっ」

騎士団の宴席で、無数の陰茎を生やした化け物に犯され悶えよがるアクエアルを見ても、若き青年騎士マリオンの心に精霊を見下す感情は湧いてこなかった。むしろ美しき女性を辱める騎士たちに怒りと失望を覚え、逆にアクエアルへの思慕と憐憫の情は日ごとに増していくばかり。

そしてエイヴァゼイン王が戦場に赴くのを待って、アクエアルとの密会を重ねるようになったのだ。青年騎士の一途な想いに水の精霊もほだされ、青年の純粋な思いについて肌を許してしまったのだった。

「どうか、今宵もこの煩惱多き哀れな男に温情を賜り下さい。騎士マリオンはアクエアル様、貴女を愛しております」

「ああ、いけません、あ、ああっ……！」

マリオンの腕が軽々と長身の美女を抱きかかえ、壊れ物のように丁寧に寝具に横たえる。完璧なプロポーションの起伏を確かめるように、乳房から腰、太ももへの曲線を幾度も撫でさする。

邪な王や騎士から蔑みの視線を投げられるのが当然の日々にあって、青年の情愛に満ちた愛撫は、それだけで精霊の心を癒やしていく。頬を紅潮させ、快感と幸福の涙を浮かべる精霊の目元に優しく口づけをすると、マリオンは紺のナイトドレスをゆつくりと脱がしていく。わずかな明かりの下で露わになっていく精霊の裸身は、数えきれないほどの陵辱の跡を寸毫も残してはいない。

「どうしてでしょう……騎士たちに乱暴されても、痴態を見られても平気なはずなのに、マリオン、あなたの前で肌を晒すのがこんなにも恥ずかしい……」

顔を赤らめて目を背け、腕で乳房と股間を隠す姿は、まさしく聖処女の振る舞いだ。か

つては民たちの前で輪姦され、全身に汚い男の汚濁をぶちまけられてよがっていたアクエアルが、自分の前でだけ恥じらいを見せてくれるというのは、マリオンにとつては天にも昇る光栄である。

「それは、貴女の魂が未だ穢れていないという証。貴女の中の処女性は、喪われてはいないのです。その清らかさに、私のここも反応しております」

「ああ、マリオンの……苦しいでしょう、私にマリオンを慰めさせて」

「うっ、アクエアル様の手が……なんと畏れ多い」

たおやかな手が伸び、おずおずと青年の股間をまさぐってくる。既に膨張したそれを取り出すと、細い指を茎の根本に絡め、軽くしごく。アクエアルは身を起こし、怒張した肉茎に唇を近づけていく。

ちゅっ……ちゅぱ、れる……花のような唇がそり立つ肉棒についばむような口づけを浴びせ、てかり輝く先端を口いっぱい頬ばる。ねつとりと絡みついてくる舌で丹念に味わい、じゅると唾液を啜り上げるように、唇で擦り上げる。慈しみに満ちた口淫に、マリオンの顔が愉悅に歪む。

「うおおッ、アクエアル様の舌使いが……ッ。そんなにされては、アクエアル様のお口を汚してしまいます」

青年の追いつめられた声に、水の精霊は淫靡な笑みを浮かべる。

「んふ……私は穢れていないと言ったのは、あなたではありませんか。それに、マリオンのならば、平気です。あなたの子種汁を、私に飲ませて……」

「うあああ……ツッ。くっ、こんなッ！ で、出ますツッ」

どびゅうううツッ！ どくっ、どくんっ……びゆるる……ツッ!!

凄まじい勢いで迸った白濁が、精霊の口中に注ぎ込まれる。

うっとりと目を細め、喉を鳴らして嚙下する精霊妃に、マリオンの興奮は加速していく。しゃらりと音を立てそうな銀の髪に手を添えて、「ぬぶうっ」と喉奥深くまでえぐり込むと、さすがの精霊も苦しげな声を漏らす。

「ああ、すみませんッ、止められない……止まらないッ」

ぎゅ……とマリオンの腰にしがみついてくるが、アクエアルはただの一滴も口からこぼすことなく、青年の粘っこいザーメンを飲み下した。

大量の迸りをすべて胃の腑に収めてしまうと、銀精霊はゆっくりと口から陰茎を引き抜く。れろりと舌なめずりをする笑みは、淫らで、しかも美しい。大量射精に萎えかけていたマリオンの分身は、見る間に元の大きさを取り戻していく。

「まだこんなに元気……もっと私を愛してくれますのですね、マリオン」

「御意にごじます、アクエアル様。ああ、花びらがこのようにいやらしいつゆを滴らせて……私の子種汁をお飲みになって、感じているのですね」

騎士の手がアクエアルの下肢を押し開いて、股間に顔を近づける。

銀のアンダーヘアに息を吹きかけ、指で肉の襞を開くと、乙女の内側は虹色の粘液でぬめっている。包皮に包まれた敏感な肉の芽に唇を被せて「ちゅっ、ちゅ」と音を立ててついでに、銀髪の精霊は身を震わせて喘ぎ声を抑える。

「もつと感じて……アクエアル様の淫らなお声を聞かせて下さい」

「ひゃ、ふううっ、は、恥ずかしい、です……ッ。はああんっ、マリオンの舌が私のおま○この穴にッッ、マリオン、あ、あつちも……あつちのはしたない穴も苛めて下さい」

御意、と青年騎士はアクエアルから賜った「身隠しの水晶」を取り出す。すると水晶は光に包まれ、棒状のものに変化していく。獐猛にめくれたカリ首に、血管の浮き出た茎、それはマリオン自身の陰茎をかたどった張り型。花びらに擦りつけて、蜜液をたつぷりとまぶしつけると、先端を尻の割れ目の奥にぬぶりと潜らせる。

「ふああああっ！ マリオンのおちんぼっ、もう一本のおちんぼがお尻に入って……ッ」
青年は張り型で精霊の裏門をぐいぐい犯しながら、肉芽や肉襞をれるるとねぶり回す。ずぬずぬと出し入れされるたびに、張り型のカリの部分で肛門肉を擦り上げ、アクエアルは腰を浮かせてひいひいよがる。

「らめええ、お尻も、クリちゃんも気持ちいいッッ！ もうっ、もう前にもちようだいっ、マリオンのおちんぼでイカされたいのッッ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>